

3. 鳥類調査

鳥類調査は、春季を平成17年6月7日、夏季を平成17年8月18日、秋季を平成17年9月20日、冬季を平成18年1月30日に実施した。

鳥類の確認種一覧は表2-3-1に示すとおりであり、8目18科46種の鳥類が確認された。また、各季の調査結果の詳細は巻末の資料4-1～2に示した。

表2-3-1 鳥類の確認種一覧表

No.	目名	科名	種名	渡り区分	平成17年			平成18年	貴重種選定基準	
					春季(6月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	環境省RDB	三重県RDB(仮)
1	カイツブリ	カイツブリ	ハジロカイツブリ	冬鳥				○		
2			カンムリカイツブリ	留鳥	○			○		
3	ペリカン	ウ	カワウ	留鳥	○	○	○	○		
4	コウノトリ	サギ	ササゴイ	夏鳥	○					○
5			ダイサギ	留鳥	○	○	○	○		
6			コサギ	留鳥	○	○	○	○		
7			アオサギ	留鳥	○	○	○	○		
8	カモ	カモ	マガモ	冬鳥				○		
9			カルガモ	留鳥				○		
10			コガモ	冬鳥				○		
11			オカヨシガモ	冬鳥				○		
12			ヒドリガモ	冬鳥				○		
13			オナガガモ	冬鳥				○		
14			ホシハジロ	冬鳥				○		
15			キンクロハジロ	冬鳥				○		
16			スズガモ	冬鳥				○		
17	タカ	タカ	ミサゴ	留鳥		○	○	○	○	○
18			トビ	留鳥			○			
19	チドリ	チドリ	イカルチドリ	冬鳥				○		○
20			シロチドリ	留鳥	○	○	○	○		○
21			ケリ	留鳥				○		
22		シギ	ハマシギ	冬鳥				○		
23			キアシシギ	旅鳥		○				
24			イソシギ	留鳥		○				
25			ホウロクシギ	旅鳥			○		○	○
26			チュウシャクシギ	旅鳥			○			
27		カモメ	ユリカモメ	冬鳥			○	○		
28			セグロカモメ	冬鳥	○			○		
29			オオセグロカモメ	冬鳥				○		
30			カモメ	冬鳥				○		
31			ウミネコ	留鳥	○	○	○			
32			コアジサシ	夏鳥	○				○	○
33	ハト	ハト	キジハト	留鳥				○		
34	スズメ	ツバメ	ツバメ	夏鳥	○	○				
35		セキレイ	ハクセキレイ	留鳥	○	○	○	○		
36			セグロセキレイ	留鳥				○		
37		ヒヨドリ	ヒヨドリ	留鳥				○		
38		ヒタキ	イソヒヨドリ	留鳥		○				
39			ツグミ	冬鳥				○		
40		ホオジロ	ホオジロ	留鳥	○		○	○		
41			アオジ	冬鳥				○		
42		アトリ	カワラヒワ	留鳥				○		
43		ハタオリドリ	スズメ	留鳥	○		○	○		
44		ムクドリ	ムクドリ	留鳥				○		
45		カラス	ハシボソガラス	留鳥	○	○	○	○		
46			ハシブトガラス	留鳥				○		
合計 8目18科46種				-	15	13	16	36	3	6

注1) 種名及び配列は「日本産野生生物目録-脊椎動物編-」(1993年、環境庁)に準拠した。

注2) 渡り区分は、一般生態の他、現地調査時の状況により区分した。

注3) 「環境省RDB」及び「三重県RDB(仮)」は、「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブック-2鳥類」(環境省、2002年)及び「三重県版レッドデータブック・2005」(三重県、2005年)<http://www1.eco.pref.mie.jp/shizen1/rdb/index_new.htm>を示す。

3-1 出現状況

目別の種数及び個体数の集計は表 2-3-2、目別の種数及び個体数の月別変化は図 2-3-1 に示すとおりである。

種数及び個体数は、春季が 15 種 223 個体、夏季が 13 種 1460 個体、秋季が 16 種 1124 個体及び冬季が 36 種 1523 個体となっており、冬季が種数、個体数ともに最も多くなっていた。

目別にみると、種数では、各季節ともチドリ目の種が 4~8 種と多い他、冬季には、スズメ目(11 種)及びカモ目(9 種)が特徴的に多くなっており、個体数では、各季節ともチドリ目カモメ科の種が最も多くなっていた。

なお、スズメ目の多くの種は、調査範囲の一部でみられる草地や樹林地のみで確認された。

表 2-3-2 鳥類の目別種数及び個体数

目名等	春季 (平成17年6月)		夏季 (平成17年8月)		秋季 (平成17年9月)		冬季 (平成18年1月)		合計	
	種数	個体数	種数	個体数	種数	個体数	種数	個体数	種数	個体数
カイツブリ目	1	2					2	7	2	9
ペリカン目	1	23	1	104	1	55	1	292	1	474
コウノトリ目	4	5	3	155	3	44	3	11	4	215
カモ目							9	321	9	321
タカ目			1	1	2	4	1	1	2	6
チドリ目チドリ科	1	27	1	4	1	1	3	43	3	75
チドリ目シギ科		0	2	5	3	4	1	241	5	250
チドリ目カモメ科	3	153	1	1134	2	911	4	403	6	2601
ハト目							1	2	1	2
スズメ目	5	13	4	57	4	105	11	202	13	377
合計	15	223	13	1460	16	1124	36	1523	46	4330

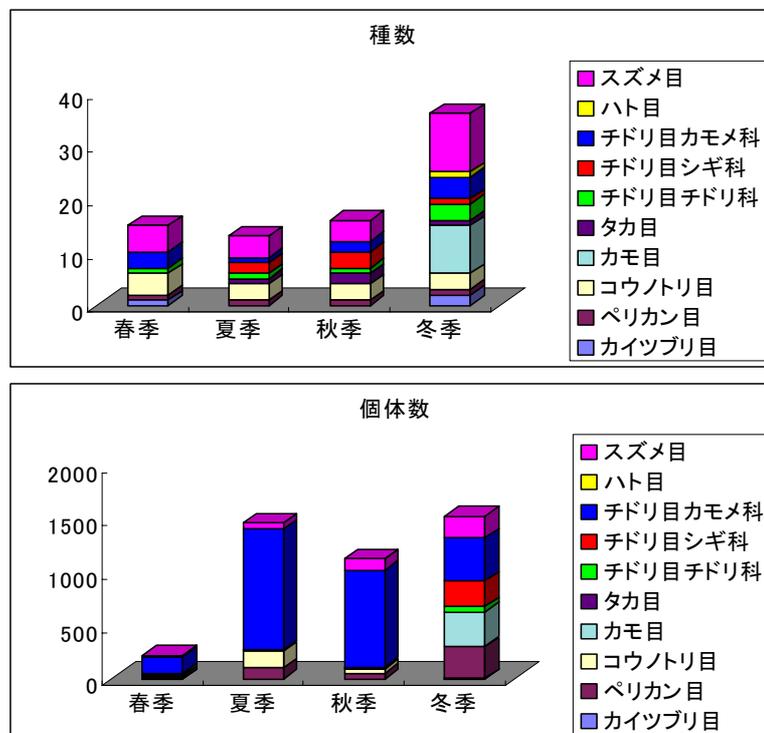


図 2-3-1 鳥類の目別種数及び個体数の季節変化

3-2 干潟部利用状況

干潟を利用する鳥類として、水辺に生息するカイツブリ目、ペリカン目、カモ目、チドリ目、スズメ目セキレイ科の種その他、魚食性のミサゴ(タカ目タカ科)について、表 2-3-3 に示す食性に着目し、7つのグループに区分した。各グループの出現状況を次頁以降に整理した。

表 2-3-3 グループ区分

No.	グループ	主な食性	種名
1	ミサゴ、カワウ、カイツブリ類、アジサシ類	海上で魚を食べる	ハジロカイツブリ、カンムリカイツブリ、カワウ、ミサゴ、コアジサシ
2	サギ類	浅瀬で魚を食べる	ササゴイ、ダイサギ、コサギ、アオサギ
3	陸ガモ類	植物の種子等を食べる	マガモ、カルガモ、コガモ、オカヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ
4	海ガモ類	潜水して貝類や水生植物を食べる	ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ
5	シギ・チドリ類	干潟でベントスを食べる	イカルチドリ、シロチドリ、ケリ、ハマシギ、キアシシギ、イソシギ、ホウロクシギ、チュウシャクシギ
6	カモメ類	魚類、死体等さまざまなものを食べる	ユリカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ウミネコ
7	セキレイ類	その他(昆虫類等を食べる)	ハクセキレイ、セグロセキレイ

(1)ミサゴ、カワウ、カイツブリ類及びアジサシ類

カワウが各季、コアジサシが春季に特徴的に多数確認された。

これらの種は、河口部に出現する浅瀬の内、海側のやや水深のある所を中心に、潜水やダイビングによる採餌の他、海側の干潟において休息する様子が確認された。

種名	渡り区分	平成17年			平成18年	合計
		春季(6月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
ハジロカイツブリ	冬鳥				1	1
カンムリカイツブリ	留鳥	2			6	8
カワウ	留鳥	23	104	55	292	474
ミサゴ	留鳥		1	3	1	5
コアジサシ	夏鳥	88				88
合計		113	105	58	300	576

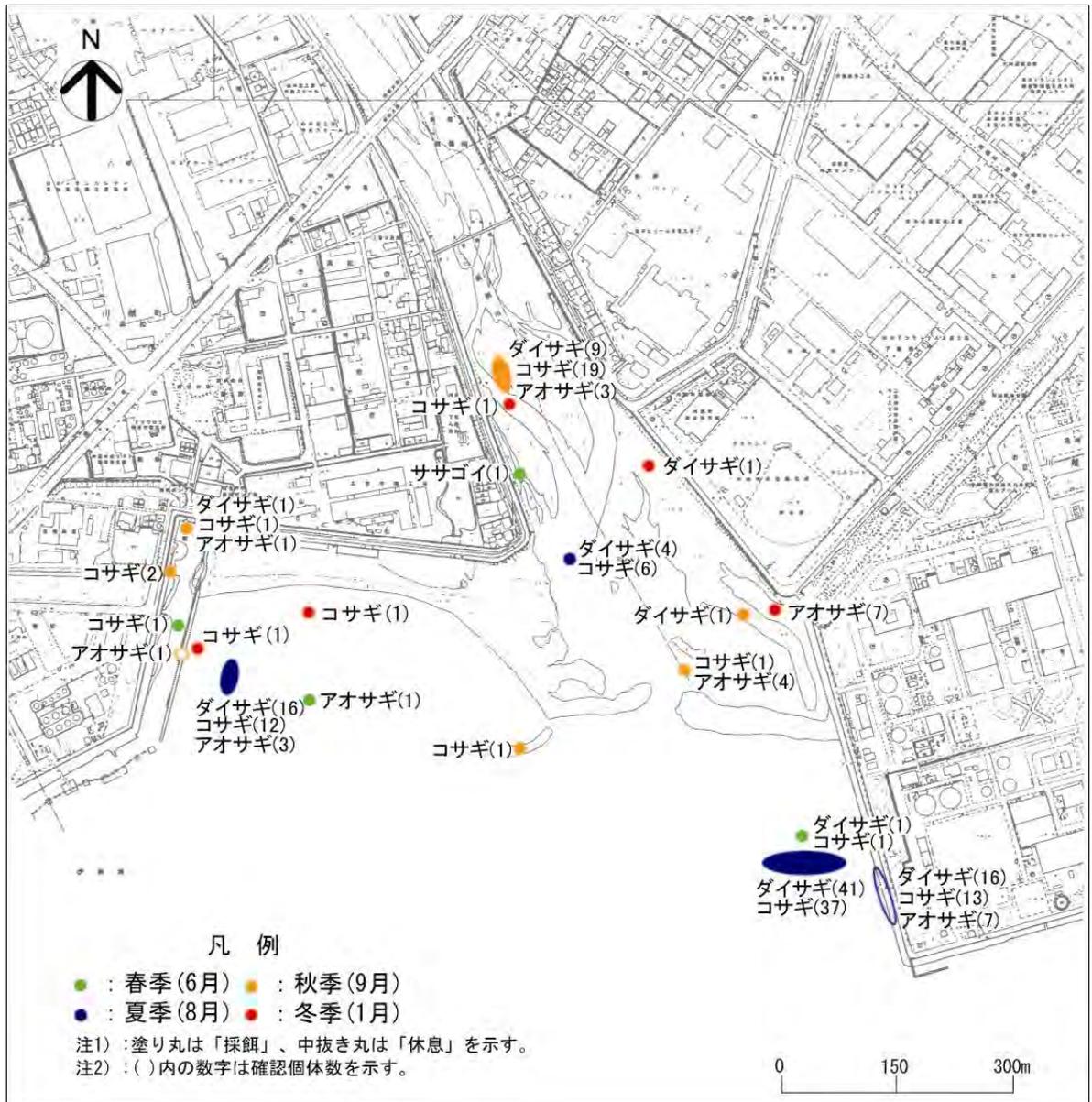


(2)サギ類

ダイサギ、コサギ及びアオサギが各季に確認され、特に夏季に多数の個体が確認された。

これらの種は、河口部に出現する浅瀬全域での採餌の他、護岸上において休息する様子が確認された。

種名	渡り区分	平成17年			平成18年	合計
		春季(6月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
ササゴイ	夏鳥	1				1
ダイサギ	留鳥	1	77	11	1	90
コサギ	留鳥	2	68	24	3	97
アオサギ	留鳥	1	10	9	7	27
合計		5	155	44	11	215



(3)陸ガモ類

冬季のみに多数確認された。

これらの種は、河口部に出現する浅瀬の内、岸辺沿いの植生がみられる所を中心に、水面上で採餌する様子が確認された。

種名	渡り区分	平成17年			平成18年	合計
		春季(6月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
マガモ	冬鳥				41	41
カルガモ	留鳥				69	69
コガモ	冬鳥				57	57
オカヨシガモ	冬鳥				3	3
ヒドリガモ	冬鳥				62	62
オナガガモ	冬鳥				33	33
合計					265	265



(4)海ガモ類

冬季のみに比較的多数確認された。

これらの種は、河口部に出現する浅瀬の内、海側のやや水深のある所を中心に、潜水等により採餌する様子が確認された。

種名	渡り区分	平成17年			平成18年	合計
		春季(6月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
ホシハジロ	冬鳥				18	18
キングロハジロ	冬鳥				4	4
スズガモ	冬鳥				34	34
合計					56	56



(5)シギ・チドリ類

シロチドリが各季に確認され、ハマシギが冬季に特徴的に多数確認された他、旅鳥であるキアシシギ、ホウロクシギ及びチュウシャクシギが夏季～秋季に確認された。

これらの種は、河口部に出現する干潟全域で、採餌する様子が確認された。

種名	渡り区分	平成17年			平成18年	合計
		春季(6月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
イカルチドリ	冬鳥				1	1
シロチドリ	留鳥	27	4	1	38	70
ケリ	留鳥				4	4
ハマシギ	冬鳥				241	241
キアシシギ	旅鳥		2			2
イソシギ	留鳥		3	1		4
ホウロクシギ	旅鳥			2		2
チュウシャクシギ	旅鳥			1		1
合計		27	9	5	284	325



(6)カモメ類

ウミネコが春季～秋季、ユリカモメが冬季に多数確認された。

これらの種は、河口部に出現する干潟の内、海側において群で休息する様子が確認された。

種名	渡り区分	平成17年			平成18年	合計
		春季(6月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
ユリカモメ	冬鳥			26	345	371
セグロカモメ	冬鳥	3			31	34
オオセグロカモメ	冬鳥				16	16
カモメ	冬鳥				11	11
ウミネコ	留鳥	62	1134	885		2081
合計		65	1134	911	403	2513



(7)セキレイ類

ハクセキレイが各季、セグロセキレイが冬季に少数確認された。

両種とも、河口部の砂浜や砂礫地において採餌する様子が確認された。

種名	渡り区分	平成17年			平成18年	合計
		春季(6月)	夏季(8月)	秋季(9月)	冬季(1月)	
ハクセキレイ	留鳥	1	1	4	7	13
セグロセキレイ	留鳥				4	4
合計		1	1	4	11	17



3-3 繁殖状況

調査範囲において確認された各種について、さえずり、巣材運び等の繁殖に関わる行動は確認されなかった。

3-4 貴重種生息状況

ササゴイ、ミサゴ、イカルチドリ、シロチドリ、ホウロクシギ及びコアジサシの6種が確認された。各貴重種の確認状況を表2-3-4及び図2-3-2、生態を資料4-3に示す。

表2-3-4 鳥類の貴重種確認状況

No.	種名	貴重種選定基準		渡り区分	平成17年				確認状況
		環境省RDB	三重県RDB(仮)		春季(6月)	夏季(8月)	秋季(9月)	平成18年 冬季(1月)	
1	ササゴイ (サギ科)		絶滅危惧II類(VU) [繁殖]	夏鳥	○				春季に右岸側の水辺において、採餌中の個体が1個体確認された。
2	ミサゴ (タカ科)	準絶滅危惧	絶滅危惧IB類(EN) [繁殖] 絶滅危惧II類(VU) [越冬]	留鳥		○	○	○	夏季から冬季に確認された。夏季は上空飛翔の個体が1個体、秋季は河口部に出現した浅瀬を中心にハンティングする個体が3個体、冬季は海上の杭上で魚を食べる個体が1個体確認された。
3	イカルチドリ (チドリ科)		絶滅危惧II類(VU) [繁殖] 準絶滅危惧種(NT) [越冬]	冬鳥				○	冬季に右岸側の砂礫地において、採餌中の個体が1個体確認された。
4	シロチドリ (チドリ科)		絶滅危惧IB類(EN) [繁殖] 準絶滅危惧種(NT) [越冬]	留鳥	○	○	○	○	各季に確認された。秋季は砂浜で休息する個体が1個体確認され、その他の季節は干出した干潟で採餌中の個体が、春季に27個体、夏季に4個体、冬季に38個体確認された。
5	ホウロクシギ (シギ科)	絶滅危惧II類	準絶滅危惧種(NT) [通過]	旅鳥				○	秋季に干出した干潟において、採餌中の個体が2個体確認された。
6	コアジサシ (カモメ科)	絶滅危惧II類	絶滅危惧IB類(EN) [繁殖]	夏鳥	○				春季に干出した干潟直近の水域を中心にハンティングする個体15個体、干出した干潟付近で休息・水浴びをする個体が73個体確認された。

注1) 種名及び配列は「日本産野生生物目録—脊椎動物編—」(1993年、環境庁)に準拠した。

注2) 渡り区分は、一般生態の他、現地調査時の状況により区分した。

注3) 「環境省RDB」及び「三重県RDB(仮)」は、「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—2鳥類」(環境省、2002年)及び「三重県版レッドデータブック・2005」(三重県、2005年) <http://www1.eco.pref.mie.jp/shizen1/rdb/index_new.htm>を示す。
また、各カテゴリーは以下のとおり。

絶滅：我が国(三重県)ではすでに絶滅したと考えられる種。

野生絶滅：飼育・栽培下でのみ存続している種。

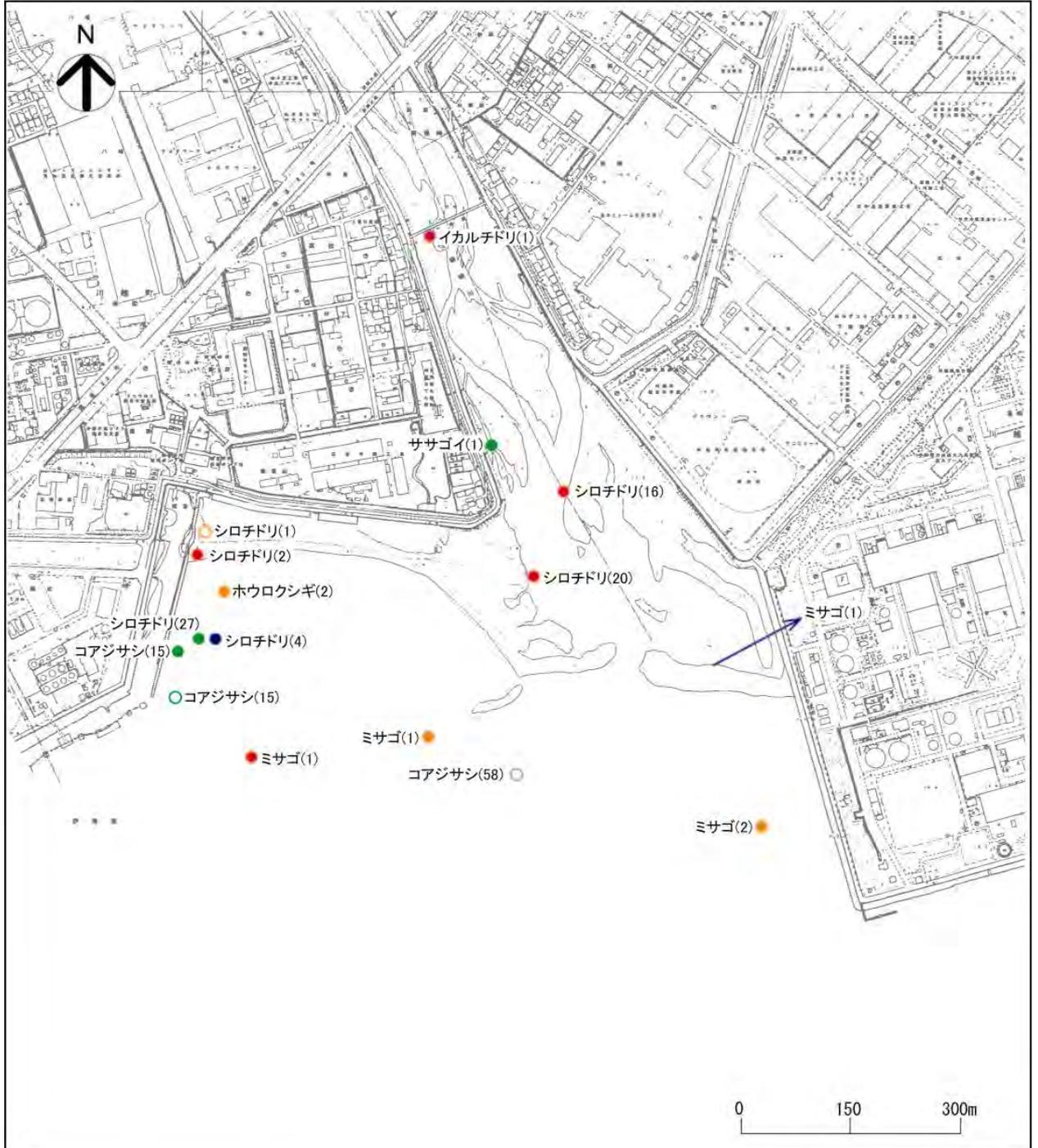
絶滅危惧IA類：絶滅の危機に瀕している種で、ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。

絶滅危惧IB類：絶滅の危機に瀕している種で、IA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。

絶滅危惧II類：絶滅の危険が増大している種。

準絶滅危惧：存続基盤が脆弱な種。

情報不足：評価するだけの情報が不足している種。



凡 例

- : 春季(6月) ● : 秋季(9月)
- : 夏季(8月) ● : 冬季(1月)

注1) : 塗り丸は「採餌」、中抜き丸は「休息」を示す。

注2) : ()内の数字は確認個体数を示す。

注3) : → は飛翔を示す。

図 2-3-2 鳥類の貴重種確認位置図